

14	神奈川県立釜利谷高等学校	全日制	普通科	26～28
----	--------------	-----	-----	-------

平成 26 年度 個々の能力・才能を伸ばす特別支援教育 研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

生徒個々の個性の伸長を目ざすとともに、関係機関と連携し円滑な社会参加を見据えた社会実践力を身に付けるための、高等学校における支援教育の推進に向けた教育課程の編成に関する研究開発

2 研究開発の概要

本校は、多くの可能性を秘めながらこれまでは持てる力を必ずしも十分発揮できなかった生徒が、高校入学を機に自己の将来を切り開くために学び直しの機会を充実させた、「クリエイティブスクール」という新たな仕組みの学校である。この特色を生かし、発達障害（学習障害、注意欠陥多動性障害等）・肢体不自由等の障害やその可能性のある生徒に対し、通常クラスで他の生徒とともに学ぶことを原則としながら、必要に応じて個別のサポートを行うという基本方針のもと、進路実現の前提となる「コミュニケーション能力」の育成に係る単位認定を伴う自立活動等を取り入れた特別な指導の領域を設置する。また、生徒間の学力差が最も顕著な数学において、基礎学力定着のための単位認定を伴う自立活動等を取り入れた特別な指導の領域を設置する。これらのことにより、障害の有無に関わらず、すべての生徒に対する有効な支援の方法について研究を行う。

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究開始時の状況と研究の目的

本校は、入学者選抜に学力検査を行わない新しいタイプの学校であるクリエイティブスクールとして今年度6年目を迎える。本校に在籍する生徒及び本校への入学を希望する生徒は、全日制普通科での学校生活を望んでいる。従って、特別な配慮が必要と思われる生徒については、本校のこれまでの教育活動である、他の生徒とともに学び、ともに活動することを学校生活の基本形態とし、特別な支援の必要な場においては、当該生徒の自尊感情を尊重し、本人及び保護者の理解を十分に得た上で個別指導を実践している。これまでも発達に課題のある生徒、外国につながる生徒、性的マイノリティーの生徒等に対し、教育相談体制を整え、学習、学校生活及び進路の実現等に向け支援を行っており、学校生活の様々な場面で生徒の個性の伸長が伺えた。本研究指定の大きな視点のうちの一つである「高等学校における通級指導の在り方」についても、全日制普通科の高等学校として、当該生徒の自尊感情や希望を十分に配慮しながら研究を進めたい。本研究では、学校としての個別支援体制を構築することで、個々の生徒の学習意欲の向上を図ったり、自己肯定感や自己有用感を高めたりすることにより、社会への参加意識を持たせることを目指したい。

(2) 研究仮説

障害の有無に関わらず、様々な課題を抱えた子どもたちの一人ひとりのニーズに適切に対応していくことを学校教育の根幹に据えた「かながわの支援教育」の考え方にに基づき、

生徒一人ひとりの特性を踏まえた適切な支援を行うことで、社会実践力が身に付き、円滑な社会参加を実現し、生涯に渡り豊かな人生を送ることにつながる。そして、これらの教育活動の実践により、特別な配慮を必要とする生徒に向けた個別の支援だけでなく、支援する周辺の生徒も含めた生徒全体の成長を促すことができる。さらに、これらのことは学校の教育活動全体の活性化につながる。

また、本研究における重要な視点として、当該生徒に向けて自立活動等を取り入れた教科指導・就労支援を行うことが挙げられる。まず、担当者が当該生徒の特性を十分に理解した上で、教職員間の協力のもと、個別の教育支援計画及び指導計画を作成する。生徒が自身の課題を認識できることがポイントになるので、何のために何をするのかを明確にし、学習意欲の向上に向けた学習内容を検討する。生徒が達成感・充実感を持てるような学習内容及び指導方法に基づいた授業を、年度途中で常時振り返りながら実施することにより、当該生徒が、他の活動にも自信を持ち意欲的に取り組めるようになる。

対象となる生徒の見立てについては、特別支援学校の教職員やスクールカウンセラー等の指導・助言などを参考にしながら、校内研究担当者会議で対象生徒を絞り込み、具体的な支援のノウハウについても、特別支援学校の教職員やスクールカウンセラー等の指導・助言などを参考にしながら、教職員全体の理解の深化を図る。また、生徒の特性に応じて、県立総合教育センター等の専門機関との連携により効果的な支援の方法を研究したい。

研究開発を推進するために、関係機関との連携は欠かせない。近隣の特別支援学校との連携は人権教育等の分野ですで行っている。教職員研修や対象生徒の見立て等において金沢養護学校との連携を深め、具体的な支援について指導・助言を得る。また、学習意欲を高める取組を行う学校であるクリエイティブスクール立ち上げ当初より本校の学校運営に示唆をいただいている外部有識者による組織である「釜利谷協議会」での協議や指導・助言を生かすことで、従来からの取組を発展させることも、本研究の大きな推進につながる。本校が従前から実施している SSE（ソーシャルスキルエデュケーション）の見直しを行い、教員がスキルアップできる研修体制を確立することも有効な手段であると考えられる。

(3) 教育課程の特例（平成 26 年度未実施。平成 27 年度より実施予定）

教育課程の特例の内容	指導内容及び目標	授業時間数・単位数等
<p>「ベーシック数学」 (時間割の中に位置付けることにより、定期的・継続的な指導を行い、単位認定につなげる。)</p>	中学校までの学習内容及び高等学校 1 年相当の学習内容を扱い、自立活動等を取り入れることにより、基礎学力の習得とともに、課題解決に取り組む姿勢の育成を図る。	<p>年間 35 時間 1 単位 (一般教室使用予定)</p>
<p>「コミュニケーション & キャリア」 (社会自立支援員による面接指導やインターンシップ体験等、通年で指導を行い単位認定につなげる。)</p>	自立活動等を取り入れることにより、就労に向けたコミュニケーション能力及び社会性、自己肯定感や自己有用感及び課題解決に取り組む姿勢の育成を図る。	<p>年間 35 時間 1 単位 (キャリアガイダンスルーム及び一般教室使用予定)</p>

(4) 個々の能力・才能を伸ばす指導（現行指導要領における一斉指導の改善工夫等）

本研究では、県内外の特別支援学校への視察及び特別支援学校教職員による指導・助言により、「教育のユニバーサルデザイン化」に向け、具体的にどのような取組ができるか、模索している。障害の有無に関わらず、教育環境を整えることで、すべての生徒にとって、学校がより居心地のよい場所となるように、また、すべての生徒にとって分かりやすい授業となることを目指し、「授業のユニバーサルデザイン化」を目標としている。

具体的には、環境整備として、共有スペースにおける掲示の明確化、教室内の掲示物の整理、特に黒板周辺の掲示物を整理することで、生徒がより授業に集中できる環境を作ることを実践した。

また、各教室の壁の色を統一するなど教室環境を一元化することで、生徒がどの教室でも安心して授業を受けられる環境づくりを進めた。

授業においては、「分かりやすい授業」とは何かについて追究することから始め、県の研究指定を受けている「確かな学力向上推進研究」と連携した研究を行うことで、教科の枠を超え、学校全体としての取組を目指している。

(5) 研究成果の評価方法

- 個別支援計画（学習支援、キャリア支援）の実施状況及びその他成長の記録
- 専門機関、保護者、関係教職員の意見
- 基礎力診断テスト（1年次及び2年次）の結果
- 卒業後の進路、及び進路先（就職先の事業所等）からの評価・意見

4 研究の経過等

(1) 教育課程の内容

平成26年度の研究においては、特別な支援を必要とする生徒の特性を把握し、通級での指導により、より一層の学習意欲の向上や学習効果が期待される教科について、教材作成及び教科指導における工夫を行うことを目標として定め、「ベーシック数学」及び「コミュニケーション&キャリア」の2つの学校設定領域に絞り、平成27度からの開講に向けて研究を行っている。また、「特別な指導の領域」における単位認定を、普通科クリエイティブスクールとして、どのように行うかについても、併せて研究中である。

(2) 全課程の修了認定の要件

学習状況、出席状況によって総合的に判断する予定である。

(3) 研究の経過

取組内容としては、研究組織の発足に始まり、先進校への視察、タブレット端末の活用、社会自立支援員による生徒支援、校内研修会の実施などが挙げられる。これらの研究・実践をもとに、次年度に実施する教育課程の特例の適用に向けた研究の方向性等について検討を重ねてきた。

	実施内容等
第1年次	<ul style="list-style-type: none">○ 研究組織の発足○ 先進校への視察

	<ul style="list-style-type: none"> ○ タブレット端末の活用 ○ 社会自立支援員による生徒支援 ○ 校内研修会の実施 これらの実践による次年度の教育課程の特例の適用に向けた研究の方向性等についての検討。 ○ 一斉授業の工夫改善 すべての生徒にとって分かりやすい授業となることを目指し、「授業のユニバーサルデザイン化」を目標としている。 ○ 学習環境の整備 ○ 就労支援及び基礎学力定着支援に係る教育課程の特例に向けた検討準備
第2年次 (27年度)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教育課程の特例の適用、全体の試行的実施 ○ 授業のユニバーサルデザイン化を意識した学習環境の整備 ○ ICT（タブレット端末等）を活用した授業の研究及び実践 ○ 学校設定領域の単位認定に向けた評価方法等の検討及び年度途中における指導・支援の検討
第3年次 (28年度)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 2年目の実施結果を踏まえた改善・実施 ○ 3年間の研究の総括

(4) 評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教職員全体の支援教育の理解と実践に関する検証 ○ 研究体制の整備に関する検証 ○ 当該生徒の実態把握と支援方法の検討に関する検証 ○ 特別な指導の領域「ベーシック数学」及び「コミュニケーション&キャリア」の内容の検討 ○ 運営指導委員会による1年次の振り返りと成果の確認
第2年次 (27年度)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 当該生徒の実態把握と支援方法の検討に関する検証 ○ 学校設定領域「コミュニケーション&キャリア」の他の教科・科目との関連性に関する検証 ○ 授業のユニバーサルデザイン化を意識した学習環境の整備に関する検証 ○ ICT（タブレット端末等）を活用した授業の研究及び実践における検証 ○ クリエイティブスクールとしての支援教育に係る現在までの取組の成果と検証 ○ 新たに設置した特別な指導の領域における生徒の学習状況の検証 ○ 運営指導委員会による2年次の振り返りと成果の確認 ○ 教職員・生徒等へのアンケートによる成果の検証
第3年次 (28年度)	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本研究開発期間終了後の、学校設定領域「コミュニケーション&キャリア」及び「ベーシック数学」のカリキュラム上の位置付けに関する検証 ○ ICT（タブレット端末等）を活用した授業の効果に関する検証

	<ul style="list-style-type: none"> ○ 当該生徒の進路実現に関する検証 ○ 運営指導委員会による3年次の振り返りと成果の確認 ○ 教職員・生徒等へのアンケートによる成果の検証
--	---

5 研究開発の効果

(1) 実施による効果

<生徒への効果>

平成26年度は、学校設定領域として平成27年度より教育課程の特例に位置づける「コミュニケーション&キャリア」の実施を見据えて、年度途中から「社会自立支援員」を雇用したことで、特別な支援を必要とする生徒に手厚い支援をすることができた。

今後も、進路が未決定の生徒も含め、継続して教職員と連携し支援を行うことで、当該生徒の就労意識に変化が生じることが期待できる。今年度の成果を検証し、次年度の具体的な支援対策につなげていく。

もう一つの設定領域として、平成27年度より教育課程の特例に位置づける「ベーシック数学」は、特別な支援が必要で、1年次における学び直しの学校設定科目「ベーシック」の授業の成果が十分に得られず学習に困難を抱える生徒について、チームティーチングという形態で通級指導を行うことで、分かる実感を持たせることを目的としている。次年度に開講し、通級で分かる実感やできる自信を持つことで、通常の数学の授業にも積極的・意欲的に参加する姿勢が期待できる。

本校はクリエイティブスクール創設当初より、特色ある学習指導・支援やキャリア教育の充実を図ってきている。そしてその成果が、就職者数や進学者数に徐々に表れている。例えば授業改善の一環として、生徒参加型の授業づくりを推進し、生徒同士が話し合ったり、教え合ったりする環境を作ることで、すべての生徒の学習意欲の向上を図っている。このような従前の取組みと、本研究開発事業で実施している取組みの両面から支援をすすめることで、相乗効果が期待できる。

<教員への効果>

インクルーシブ教育の概念が本校の全教員に十分理解されているとは言い難い。しかし、目の前にいる生徒への効果的な対応を模索している教員が、研究開発をすすめる中で、インクルーシブ教育の考え方に興味・関心を深めるようになった。その結果、支援教育に関する研修会・会議などでは様々な意見交換が行われ、教育活動について見直す場面が生まれたことは有益であった。

また本校では、すでに支援を必要とする生徒に対し、教育相談コーディネーターを中心にケース会議等を開き個々の状況に応じた対応をして成果を上げている。本研究開発を契機として、このような動きをさらに進めることで、本校における支援体制が拡充していくと考える。

<保護者等への効果>

保護者に対しては、まだ効果が見られる段階には至っていない。今後、PTA関係の会議を通して本校が研究開発指定を受けていることを周知し、教育環境のユニバーサルデザイン化の推進に向けての理解と協力を呼びかけ、平成27年度以降、協力して取り組める具体的な内容を検討している。

学校評議員や釜利谷協議会の委員の方からは、クリエイティブスクールとしての指導効果が地域に浸透してきているという評価をいただいております。地域の小学校等と連携した活動や地域清掃等により、地域との交流・連携を行っている。本研究開発を進め生徒の社会性を育成することにより、地域に貢献できる人材育成を目指したい。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

- インクルーシブ教育に対する教職員の共通理解が必要である。そのために校内での情報共有をこまめに行いたい。また、校内研修の実施により、高等学校における支援教育の在り方について研鑽を積み、全日制普通科に在籍するすべての生徒への具体的な支援方法を研究することが挙げられる。
- 学校設定領域「ベーシック数学」については、教科及びカリキュラム開発グループと連携し、協同作業を進める。すでに設置されている「チャレンジ&ベーシックⅠ」の数学領域との指導・支援の関係を明確にしながら研究を進める。単なる教科指導にではなく、当該生徒が興味・関心を持って学習に取り組み、達成感や自己肯定感が実感できるよう、自立活動を取り入れた指導を検討する。
- 支援の対象となる生徒の絞り込みのプロセス及び当該生徒への合理的配慮、合理的支援に向けた有効な方策を検討し、生徒及び保護者への理解を求める。必要に応じて、特別支援学校から人権意識について助言を得ながら対応する。